

多和田葉子の『旅』

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(たにぐち・さちよ)

谷口幸代

再発見する場となった。

ここでは、多和田が好んで描く『旅』の小説の中から『ゴットハルト鉄道』(『群像』一九九五・一一)に乗って、どのように「移動性高気圧」によるメタモルフオーゼが生じていくのかを考えてみたい。

〈「ゴットハルト鉄道」の旅〉

ロラン・バルトは作者は死んだと言ったが、多和田葉子によれば、作者とは「死にながら人に逢いに行く移動性高気圧のこと」となる。とすると、本学は幸運にも二度にわたって(多和田移動性高気圧)を迎えたことになる。二〇〇三年三月七日の講演『Exophonie』が最初で、『エクソフォニー』(岩波書店、二〇〇三・八)として発表される言語観や創作観が作者自身によって一足先に語られる贅沢な時間となった。次は二〇〇五年一月九日の越境作家フォーラムのパネラーとして、デビット・ゾペティ、アーサー・ビナード、毛丹青という三人の日本語作家と共に訪れた。このフォーラムは、『犬婿入り』(『群像』一九九二・一二)の「キタナラ塾」のように生き物としての言葉の魅力を

『ゴットハルト鉄道』の旅はアルプス縦断トンネルを抜ける鉄道の旅である。空間的移動だけでなく、ドイツ語圏からイタリア語圏への言語的越境でもある。この旅では「ゴットハルト」という峠の名が列車の「ごつとごつと」と走る音に惹かれて鉄道名に変身し、語り手の「わたし」に「ゴット」(神)と「ハルト」(硬い)へ分解されて、髭の男の像がたち上る。[AROLO]という地名の「O」はトンネルの出入り口になり、「ゲツシェネン」という地名は「硬い石が

ゲツと擦れ合い、砂利がシエツと滑り落ちて、谷底で湿ってネンの粘土質に変化した」と音への解体を通して石のイメージを喚起する。「わたし」の想念は、知性や理性によらず意味と形と音の連想からアルファベットと日本語の間を自在に往還し、「外国語の中で固有名詞というのは生きもの」^③だという多和田の言語意識を形象化する。

多和田はこの作品はドイツ語の『Im Bauch des Gothards』(『Talisman』Konkursbuchverlag 一九九六)を自分で日本語にしながら、浮かんたいメージや表現を取り入れたものだと明かしている。^③両作品を比較した田中純「人形文字／文字という人形」(ユリイカ)二〇〇四・一二、臨時増刊号)は、ドイツ語版では「あらゆるOがトンネルに見え、あらゆるGが硬い石に変化し、あらゆるZENが粘土に変わる」などの卓見を示した。この見方をヒントにすると、日本語版の漢字の「口」はこの「O」に通じるものに見える。例えば「Kahn」の「ö」を人間の開いた唇で表現する「Süddeutsche Zeitung」の広告と同じように。日本語版には繰返し「口」が出てくる。髭の男は「口をきこうとしない」し、ライナーは「口もって」、運転手は「無口」だ。対する「わたし」は周囲が困惑することを「口から外に出した」

越境の文学

第1部

とある。この小説は沈黙と言語化のせめぎ合いの物語でもある。

「O」は既に『文字移植』（ブックT H E 文芸）一九九三・三、原題『アルファベットの傷口』で言葉のマグマの噴火口だった。『ふたくちおとこ』（文藝）一九九七・秋、原題『二ダーザクセン物語』や『Till』（『Ophheus oder Izanagi』Konkursbuchverlag）一九九八）には二つの口から繰り出される言葉で悪戯するテイルが登場する。また詩「月の逃走」（『Nur da wo du bist da ist nichts』同前、一九八七）では「月がわたしに会いに来た」ため空に「穴」が空き、「月のような不安」や「月のような憂い」といった使い古された比喩は解体され、自立語に付属する助詞と助動詞「のような」だけが頭と尻尾を失って見知らぬ顔で浮かび上がる。

多和田作品では、「O」も「口」も、そして「穴」も安定していたものを揺り動かすエネルギーが飛び出す亀裂となる。『ゴットハルト鉄道』の「わたし」は「ゲッシーネン」と「口」にしてみる」と不安が薄れたと語る。そのエネルギーは読者の中に膠着していた既成概念という雲を取り払い、意識や認識を変容させる。テクストの誘惑に身をまかせれば、例えば「ベルクさん」は山を意味するドイツ語 Berg がむくむくと立ち上がって人に

なったように見え、ライナーの名前だつて列車のように響く。山を貫通する列車という小説のテーマがドイツ語版には登場しない二人の人物となつて動き回っているように思えてくる。この時、『ゴットハルト鉄道』というテクストそれ自体が魅惑的な思索の旅となる。

「Ich」から「わたし」へ

『ゴットハルト鉄道』の「わたし」は乗車体験記を依頼されて、ゴットハルト鉄道に乗り込んだ。しかし「わたし」は、「在独日本人作家」の代理を引き受けた「替え玉」だつた。同じく「Ich」の一人称で語られるドイツ語版は「meines dreizehnjährigen Aufenthalts in Hanburg」[mit japanischen Touristen] といった箇所からハンブルク在住の日本人だとわかる程度しか説明がなく、日本語版のような代理人という設定も見当たらない。

多和田は「文学的エッセイ」と呼ぶ自作の「Ich」は、ドイツの生活を外側から眺める異国人が文化の諸相を語る「人類学者的外国人労働者」の「わたし」だと説明する。『In Bauch des Gothards』の「Ich」も同様にとらえてよいだろう。この「Ich」が「わたし」に変わる際に代理人に

なったのは、「翻訳者みたいなものかもしれない」と発言している。翻訳者とは、多和田文学では言葉を折り目正しく置き換える人では決してない。安定した言語体系をかき乱し、その裂け目からマグマを噴出させる創造的な破壊行為者である。

「わたし」は職業としての翻訳者ではないが、例えばドイツ語版の「Durch den Gothard zu fahren hieß, durch den Körper dieses Mannes zu fahren。」という箇所が、日本語版は「ゴットハルトの中を通り抜けて鉄道は走る、とスイス人たちは言う。つまり、男の身体の中を通り抜けて走ると言うこと。長いトンネルに貫かれたその山は、聖ゴットハルトとも呼ばれています。つまり、聖人のお腹の中を突き抜けて走ると言うこと。」と、接続詞の「つまり」を重ねてスイス人の言説をとらえ直す。これは「わたし」という身体を通した翻訳行為である。「わたし」は「固まるものはみんな嘘」だといひ、さらにヨーロッパはあると思ひ込んでいただけかも知れないと疑う。これが翻訳者としてのあり方である。言語や思考にこびりついたコードを溶かすという点で、旅することと翻訳は同義となる。

しかし、「わたし」は「ゴットハルトのお腹」に「入ったとは、とても思えなかった」という。ゴットハルト

トの中、つまり「個々の言語が解体し、意味から解放され、消滅するそのぎりぎり手前の状態」には簡単にはたどり着けない。言葉を生み出す「石の呪術」で、「白い知」になった雪原に足跡を呼び戻そうとすることは、言葉が意味から解放された地点に文学は成立するのかもしれない。過激な命題を引き受けて書く作家の姿に重なる。

だから翻訳という旅は続く。『容疑者の夜行列車』(青土社、二〇〇二・七)の旅人は「あなた」である。永遠の乗車券と交換に、自分を自分と思う「ふてぶてしさ」を失ったというこの「ふてぶてしさ」を、ここではナショナルな考えにとらわれたあり方と解釈してみたい。すると、それと引換えに得た乗車券はトランス・ナショナルなあり方を旅人が獲得したしるしとなる。この人称に関して、多和田は「何者でもない人、または何者でも」なり得て、「目になり切る」存在を意図したと説明する。二人称の旅人はその後『アメリカ』(同前、二〇〇六・一一)で移民の国といわれるアメリカを自動車で旅する。

この間に執筆された『旅をする裸の眼』(「群像」二〇〇四・一二)とそのドイツ語版『Das nackte Auge』(Konkunsbuchverlag、同年)では「視力自身が裂け目」、「die Sehkraft selbst ist eine

Spatze」と視点自体を覗き込むことで、国境、言語、政治体制を越境した主人公の放浪(語り、記憶)を幻想に包み込んだ。そして『海に落とした名前』(「新潮」二〇〇六・九、原題『レシート』)の旅人は記憶を失う。国家や民族といった大きな物語が終焉したとされる現代において、個人の小さな物語を構成する記憶も剥ぎ取られた。このように自己を取り巻くあらゆる虚構から自由になり、新たな文学の地平をめざす旅人からますます目が離せない。

注

- (1) 共同研究報告書『多和田葉子』(土屋勝彦・G. ボガチュニク編、二〇〇四・一二)への特別寄稿。
- (2) 「言葉のトンネルをぬけて」講談社文芸文庫『ゴットハルト鉄道』、二〇〇五・四。
- (3, 4, 6) インタビュー「言葉に棲むドラゴン、その逆鱗にふれたくて」(「すばる」一九九七・三)。
- (5) 講演「言語の狭間」(早稲田文学)一九九九・三)。
- (7) 前掲『エクソフォニー』。
- (8) シンポジウム「翻訳の詩学」(「群像」二〇〇七・一二)。

* 小稿は科学研究費補助金基盤研究B「越境する文学の総合的研究」(平成一七～一九年度)の成果の一部である。

